
殺人者には100万円

ゴンギツネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺人者には100万円

【Nコード】

N8219X

【作者名】

ゴンギツネ

【あらすじ】

ボスが3人に殺人を命令した。「五人だ。五人殺せ」命令された人はどうするのか。殺人を犯した人は、何を思うのか。1ヶ月に一回更新できれば良い方だと思います。

始まり

ボス・・・・・・・・冷酷さ

・・・・・・・・力

・・・・・・・・金

・・・・・・・・頭の良さ

34歳。組織スカイキラー（空の殺し屋）のボス。基本的に悪い人。

石間和人・・・・・・・・冷酷さ

・・・・・・・・力

・・・・・・・・金

・・・・・・・・頭の良さ

26歳。臆病者。頭の良さを買われてスカイキラーにはいった。

唐沢雄太・・・・・・・・冷酷さ

・・・・・・・・力

・・・・・・・・金

・・・・・・・・頭の良さ

23歳。元から、暴力が好きだったので、スカイキラーに入団。

東村大介・・・・・・・・冷酷さ

・・・・・・・・力

・・・・・・・・金

・・・・・・・・頭の良さ

17歳。スカイキラーのメンバーの一人目。【2年前の事件】とともに、荒れていった。殺人もしたことがある。

山川里美・・・・・・・・冷酷さ

・・・・・・・・力

・・・・・・・・金

・・・・・・・・頭の良さ

22歳。警察官。交渉事が、結構得意。東村の過去の事件を知る人。東村が信用する、ただ一人の人。

「五人だ。五人殺せ」ボスはワイングラスを右手に持ち、口元に持っていた。

「五人？本気ですか？」驚きの混じった声が出た。

もう一人は、顔が引き攣るのを感じながら言った。「五人も殺せば

言葉は、最後まで言えなかった。冷酷な声が、彼の言葉を遮ったからだ。

「本気、だ。今から、抜けるか？」

背中が、震えた。彼には、その言葉が暗に、抜ければ殺す。と言っているように聞こえた。逆らうな。本能が叫び声をあげた。

緊張感が、この部屋を圧迫する。

その雰囲気消すように、ボスは、ふつと、頬を緩ませて言った。

「一人につき百万やろう。合わせて五百万だ。それじゃあ、解散」

石間和人は、真剣に悩んでいた。今思うと、あの部屋に居たのが、夢だったら良かったな、と思った。現実逃避をしても、仕方ないことは、分かっていたが、認めたくはなかった。悩んでいても、仕方がない。腕組みをしている手を組みかえようとした時、運命は決まっていたのかもしれない。手が、人に当たった。

「あ、すみません」

頭を軽く下げ、立ち去ろうとした時、肩を掴まれた。

「おい、兄ちゃん。俺は、ここら辺を取り締まっている松坂豪だぞ。覚悟はできているだろうなあ？」

無視をして、立ち去ろうとした時、頬に拳がめり込んだ。

「シカトかあ？ふざけているのか？おいっ！」

正当防衛。この単語が、頭の中にちらついた。そうだ、

このままでは、殺される。これは、正当防衛だ。突然、頭の中のスイッチが押された。和人は、近くにあった焼酎の瓶で、松坂の頭を殴った。叫び声の後、急に、松坂はおとなしくなった。しかし、殺すためには、もう一回殴らなければ。殴打になってしまったのは、警察の不振を買うかもしれないが、精神が、錯乱していたと思わせればいい。骨の硬さの後、柔らかな感触。瓶を放す。血が、糸を引いた。後頭部が、少し、へこんでいる。予想していたのより、血が出ていなかった。逃げよう。シナリオは、松坂に肩がぶつかったときに、謝罪したのに暴力を振われた。殺されると思ったので、近くにあった瓶で殺してしまった。逃げたのは、殺してしまった動揺から。・・・俺は、悪くない。

被害者NO.1

被害者・・・松坂豪（27）暴力団の一員。

死因・・・撲殺。

凶器・・・ガラスの瓶。

石間和人、獲得賞金百万円。殺害数一人。

山川里美は、頭を抱えていた。この町で起きた殺人事件の犯人が、まだ見つからないのだ。おまけに、被害者が、暴力団のボスだったことから、上司も事故だったのではないかと言いだすし。どうやったら、事故で、殴打されるのか。焼酎の瓶がそんなにいいタイミングで（よくはないが）落ちてくるのか、を上司に聞いてみたい。暴力団だって、殺せば殺人だ。分かっているのだろうか。

・・・まあ、たしかに最近、事件が減ってきたが。あの暴

力団、万引きから麻薬まで、幅広く活動していたみたいだ。しかし、今回の事件は、本当にシンプルだ。つらつらと考えていると、電話がきた。

「……もしもし、山川です。どうしましたか？まさか、あの事件が、事故だったなんてことはないですよね？……どうやったら、事故で、殴打されるのか。焼酎の瓶が、そんなにいいタイミングで落ちてくるのかを聞きたいものです」

すごく早い口調で、一方的に話す。

「いや、その犯人が、自首してきた」

「はい？もう一回言ってもらえますか？」

「いや、その犯人が、自首してきた」

「……一字一句変えずに言ってきた。しかも、見事なまでの棒読みである。最初の方が、感情がこもっていなかった。いや、問題はそこじゃなくて。」

「自首？どうしてまた？」

「詳しいことは、署で話す」

分かりました。と、言つて、電話を切った。急いで署に行こう、と電車に駆け込んだが、……駅員に怒られて、むしろ遅くなくなってしまった。

テレビのニュース番組を見ている。アナウンサーの淡々と喋る言葉の一つ一つが、心に突き刺さった。

「昨日の午後8時ごろに、暴力団関係者の松坂豪さん（37）が路上で死亡していた事件で、頭に殴打された痕跡があることから、警察は殺人事件とみて捜査をしています。では、次の事件です」

殺人事件。そうだ。俺は、人を殺したんだ。死んで償おう。その前に、警察に事実を伝えよう。ワンコールで相手はでた。はきはきとした男の声。少し、年をとっていいそうだ。

「もしもし」

「はい、こちら110番。なにかありましたか？」

「あの……自分、人を殺してしまいましたので、お電話差し上げたのですが」

「殺人？詳しく話してください」

一言話すごとに相手の声は、厳しくなっていく。電話で罪を言い終わると、ホームセンターに行つて、ロープと、釘を買つた。レジの人は、不審げに顔を見たが、会計を終えると、心にもない声で、ありがとうございましたと言つた。

チェーンロックをかけて、釘を壁に数本ほど打つ。そして、ロープをかけた。最終段階だ。自殺を実行する。息を吐いて死をカウンtdownする。3, 2, 1 0。ぐつと気管が絞まる。意識が消える前に、こう思った。走馬灯、視れなかつたな、と。

被害者？2

被害者……石間和人

死因……首つり自殺

凶器……ロープ

石間和人。死亡のため、賞金は無効。殺害数2人。

「自殺？」

里美は、驚いた。

「ああ、容疑者は、自殺した」

課長は、胸ポケットから、煙草を取り出した。

「なぜ、自首した後に、自殺をしたんですか？」

「そんなのこつちが知りてえよ。何だつてんだ、まったく」

里美は、深呼吸をして気を落ち着かせようとするが、課長の煙草の煙で噎せてしまった。咳が、やっととまった。涙が、溜まっている。よし、こういうときは、深呼吸だ。

……また、噎せてしまった。

「まったく……学習能力あるのか？そんなんじゃない、念

願の刑事になれねえぞ」課長が、呆れた目でみている。

「いや、もうなつていますから」

「それはそうとして、これは、多分迷宮入りだぞ。容疑者死亡だからな」

「今、無視しました？ しましたよねえ？」課長が、里美に煙草の煙を吐き出した。また噎せ、恨みのこもった視線で、課長を見た。そしてなにか思いついたのか、光った目で、言った。

「まったく、そんなことばかり言っていると、お嫁さんに逃げられますよ？」

「女房には、1ヶ月前に逃げられたよ」

何を言えばいいのだろうか。

「えっと、ご愁傷様です？」

「……………」課長は、無言だ。

「なんか……………」すいません」

「……………」

「さて、撃沈している人は、放っておいて、なにか分かった？」
里美が聞くと、どもりながら、捜査員が言った。里美は、かなり美人である。

「は、はいっ！ 石間和人は、そのホームセンターで、釘とロブを買ったみたいです」

「ふうん、そう」

素っ気ない返事を返す。捜査員は、嫌われているのではないかと内心思うが、里美は、気にしなかった。

「そういえば、課長、大丈夫ですか？」

「いや、だめだ。もう、俺のガラスのハートが粉々だ」

「それだけ言えれば十分ですね」

「ああ。あれは嘘だしな」

しれっと嘘発言をする課長。

「心配して損したじゃないですか」

「まあ、おそらく、刑務所に入りたくなかったんじゃないか？」

「じゃあ、自首しなきゃ良かったんじゃない？」
さりげなく話題を変えられたことに、里美はまったく気がつかない。

「良心が痛んだんだろ」

部長が話し終えた時、無線機から連絡があった。

「市 から、緊急要請。ただちに収集せよ」

パトカーへすぐに乗り込み、サイレンを鳴らす。周りの車が、端に寄っていくのは、見ていて中々の爽快だ。実は、警察になったのはこれも目的の一つだったりする。自分でも刑事としてどうなの、と思った。

目的地につくときには、12時を少し過ぎていた。ちょうどお昼だが、食べる暇はない。

「ここで何がおきたんだ？」と、課長。

「知りませんよ。人の昼飯を邪魔しやがって」

「お前、口悪いよ？どうにかしたらどうだ？」

課長が言うが、知ったことじゃない。

「食べ物への恨みです」と、親切に答える。

「確かに、お前、食い意地が張ってい……………」

ボディブローを課長の腹に決める。顔面に入れなかった私を褒めてあげたい。このデリカシのなさには、逆に感心する。

「ぐっ……………馬鹿力だな、おま……………」

「女性に言っていていいことと、悪いことが、あります」また、同じところに入れた。

「まったく、少しは、課長を崇めろ」

「あなたが課長になっっているのが、不思議でしょうがないです。デリカシーの欠片もないです。後、課長を崇めるぐらいなら……」

「……何でもありません」

「本当は、崇めたいんだろ？無理しなくても……」同じところに、里美の拳がある。また、うめき声があがった。

「あ、巡査長、何がおきたんですか？」這いつくばっている課長は、綺麗に無視し、巡査長に尋ねる。

「殺人事件だ」

「殺人事件？二人目ですか？ここ最近、殺人事件多くないですか？」

「まあ、二件目だが、異常だな」と、巡査長。

「呪われているんじゃないか？」いきなり復活した課長が、言った。

「縁起が悪い、やめてください」呪い、と聞いて少し怖くなった里美が言った。

「おお、女々しい。お前、男じゃなかったのか？」本日四度目のボディブローが炸裂した。「こんなのだから男って言われるんだよ」と言った課長に、5回目、当たった。

「課長、漫才もどきはやめましょう」

「おお、そうだな」

「ええと、捜査しますよ？」完全に空気になった、巡査長が、言った。

「あれ？お前いたっけ？」課長が、発言する。

「……課長……」涙をぬぐう演技をする巡査長。30代のおじさんのその様子は、はっきり言って、気持悪い。

「被害者は、斎藤麻里さんです。24歳で、刺殺されたみたいですよ」気を取り直した巡査長が言った。そうか、と課長が言った。課長は、里美をからかうこと以外では、至って真面目である。

唐沢雄太は、ひどく喜んでいた。やっと、ボスから殺人の許可をも

らえた。そうと決まれば、と唐沢はネットの通販でナイフを買った。架空の名義で借りたアパートへナイフを送らせ、そこに取りに行った。遠くに行った場合、かえって疑われるため、近くで殺すことにした。

ナイフを持ち、午後8時ごろに街に出た。昼でさえ暗い路地につくと、そこで、獲物を待つことにした。1時間半ぐらいで獲物はききた。若い女だ。殺せる、と確信し、興奮した。やっと、殺せる。いきなり飛び出して、タオルで口をふさぐ。後は、ナイフで刺すだけだ。つ、つ、つ、とナイフを滑らせ、胸の所に持って行った。予想外の反撃がおきた。女が、タオルを引っ張って逃走を試みたのだ。無駄な抵抗を、と唐沢は微笑した。女の力で俺の力に、勝てるはずがない。

もう、いいよな。殺して……心音が大きくなる。ひと思いに殺ってやるう。力を込めた。少しの抵抗のあと、皮膚が、肉が裂けた。暗くてよく分からないが、黒い液体が見えた。もう、死んだらうか？

ありがとう。少しの間だったけど、楽しかったよ。

被害者？3

被害者……斎藤麻里

死因……刺殺

凶器……果物ナイフ

唐沢雄太。殺害数2。賞金100万円。

始まり（後書き）

唐沢の殺害数が2なのは、過去に1回殺しているからです。

4人目

一人目を殺した後、10日後に殺人を執行することにした。同じ場所は、警戒されていると思い、上空写真を見て、気がなさそうな所を探した。あった、ここだ。

下調べをするために、電車に乗った。アナウンスがなり、最寄りの駅に着いた。切符を改札にいれ、駅を出る。

その公園は、昼だというのに、人がいなかった。いいぞ、ここなら、殺れる。問題は、何で殺すか、だ。絞殺でいいかな、いや、撲殺か？ やつぱり、絞殺がいいか。

息を潜め、隠れる。来た　今回も、女だ。ロープの上で指を滑らせる。

「そこまでだ。唐沢雄太、殺人の容疑がお前に掛かっている。署まで来て貰おうか」

男の声が聞こえる。見れば、女も男も銃を構えていた。

「何故分かった？」

と聞いた。

「彼女の爪に、お前の皮膚が付着していた。昔、殺人を犯しただろう？ その時の手口と非常に似ていたからな。お前の皮膚をその時に取っておいたんだ。ああ、こいつは、また殺るな、と思ったからな。その皮膚同士をDNA鑑定してもらったよ。89%一致だつてさ。ああ、山川、こいつに手錠をかけて」

「よせ、やめろ、俺はまだ殺し足りないんだ……………。血……………。血……………。血……………。来るな、来るなああああ！」

後ろに下がる。フェンスを越そうと思った。こ……………。した？ 妙な浮遊感。ばちゃん、と水の跳ねる音。何で？俺は、水に浸かっていた。そしてそのまま流される。落下。最後に俺の聞いた音は、がしゃん、という自分の首が折れる音だった。

被害者？4

被害者……唐沢雄太

死因……落下の衝撃による首の複雑骨折

凶器……水

唐沢悠太。殺害数3。死亡のため、賞金は無効。

「あゝあ、死んじやいましたかね……」

と私が言う。

「ああ、死んだらうな」

と、課長。

「それにしても、殺人者って良い死に方しませんね」

石間和人にしても、唐沢雄太にしても、良い末路にならない。

「まあ、そうだな。ああ、一応パトカー呼んどいて。俺が救急車

呼ぶから」

110番をする。

「はい、こちら110番」

「あー、私、山川里美よ。唐沢が、死んだみたいで」

「は？死亡？」

動揺した声。

「うん」

「はあ、じゃあ今行きます」

数分後、パトカーと救急車が来た。

4人目（後書き）

何この話・・・。。書きにくっ！あゝあ、居場所のほづが2
倍は書きやすい・・・。。。

放火は？

東村大介は、どうすべきかを悩んでいた。捕まると、『あの事件』のこともあるから、結構な刑期だろう。しかし、やらないとボスに殺される。長年の勘からして、あの目は、真剣な目だ。おそらく、殺人は躊躇わないだろう。

捕まらない為の、プランを練る必要がある。

放火……。それだと、直接人を手にかけるわけではないから、ボスが何を言うか。しかし、これなら5人殺すのは、簡単だ。「今日は、菊池さん？ああ、あの、ボスに回してください」

迷ったが、電話の方が良いと判断した。放火をして、駄目だと言われたら、デメリットが大きい。そして、なにより、大介はあそこの空気に耐えられない。

「ボスに？なんで」

不審そうな声。しかし、悟られるわけにはいかない。

「1か月前の件と言っていただければ」

「ふうん、俺には教えてくんないんだ」

いくら先輩の頼みともいえども、こればかりは駄目だ。

「すいません。4人だけの秘密なんで。ボスと、自分と唐沢先輩と石間先輩だけの」

驚くべき答えが、返ってきた。

「ええ？あの2人、死んだよ？」

がり勉石間と、バカラ沢。それが、大介のあの2人にたいしての渾名だった。

「が、石間先輩と唐沢先輩が？」

危なく、言葉に出してしまうところだった。しかし、がり勉はともかくとして、バカラ沢は簡単に死ぬ奴ではないのだが。

「うん。まあ、ボスを呼んでくるよ」

「ええ、お願いします」

何故、あの2人は死んだのだろうか。考えていと、低い声が耳に入った。

「大介、どうした？」

「あの、放火も数に入るのかって思いました」

しばらくの間。おそらく、思案しているのだろう。

「いや、入らない。直接、殺れ」

やはりか。

「あの2人は、死んだが、お前には期待しているよ」

「ありがとうございます。では、要件はそれだけです」

そう言ったら、電話は切れた。

さて、どう殺すか。刺殺、絞殺、轢殺。大介の頭は、すでに回転し始めていた。

放火は？（後書き）

やったぜ、久しぶりの更新よ？

男と女を混ぜてみましたゴンギツネです。

読んでくださった方、ありがとうございます！

一酸化中毒で殺そう！（前書き）

おまたせしました。申し訳ありません。

一酸化中毒で殺そう！

決めた結果、一酸化炭素を使うことにした。一酸化炭素、CO。ヘモグロビンとの結びつきがよく、少量でも死亡するという。この一酸化炭素を、使った自殺もあり、使い勝手も良い。しかも、顔が赤くなるだけなので、なかなか発見できないという利点もある。わざわざ死体解剖されることもないだろう。殺人の時は、ビニールを頭にかぶせて、紐で、軽くビニールの口の部分を縛り、あらかじめ開けてある小さい穴から、一酸化炭素を注入するだけである。一酸化炭素は、機械を掃除するための「エアークリーン」一吹きで奥のほうまでピカピカに！「を、使い切り、代わりに一酸化炭素を入れることで用意できた。

殺人のためには、女を選ぶほうが良いだろう。カモ男よりはないし体が細いからビニールも被せやすい。(プロレスラーなど、格闘技をやっている場合は分らないが)

そのためには、待つ必要がある。怪しまれない程度に、どんな人が、いつ来るかを2週間位張り込んだほうがいいだろう。暗い路地を2時間ほど探すと、見つかった。大介は、あの事件のことを思い出していた。あの事件も、暗い場所で起きたのだ。

私立都賀田高校は、偏差値がそう高くはない高校で、かなり荒れている高校だった。大介は、喧嘩は嫌いだったが、腕っ節はかなり強かった。なので、しょっちゅう喧嘩に引っ張り出されては、相手を叩きのめした。

あの時も。

あの日は、雨が降っていた。思えば、あれも事件が起きる予知前兆だったのかもしれない。

「おい、また大島が俺のダチに絡んできてよー。東川、お前も来てくれないか？」

青木和義という人物が近寄ってきた。

「断る。お前らだけでやっていろ」

「いいだろ？友達じゃねえか」

こいつは何故、こんな不良っぽい言い方をしてくるのだろうか。俺のほうが、強いはずなのだが。

「頼むよ、だ・い・す・け・く・ん・お・ね・が・い？」

「ウザイ」

切り捨てた。これで諦めてくれればいいのだが。しかし、その願いは叶わなかった。

「あれえ？いいの？お前が万引きしちゃったこと言っちゃって」

顔から、血の気が引いた。いつバレたのだろうか。

「いつ……いつ見た？」

きやははっ、という耳障りな笑い。

「釜をかけただけ。やっぱりやったんだ。ねえ、来てよ、だ・

い・す・け・く・ん・お・ね・が・い？」

こいつ……。しかし、怒りを悟られる訳にはいかない。しかも、もしこいつがなにかの気まぐれで誰かに言ったら、警察にマークされてしまう。殺すか。それが一番良い方法だった。

大島が来るといって、1時間も早く裏路地に着いた。大介は、隠し持っていたハンマーを思いっきり、青木の頭に叩きつける。すると、彼の頭は、血で赤く染まった。テレビで、髪を赤く染めている芸能人がいることを、関係のないこの場所で思い出した。

改めて、青木の顔をじつくりと見る。すると、青木の瞼が軽く痙攣した。まだ、生きているのか。甘かった。見ていなかったら、少年院に行っていたかもしれない。少年法。なんとも無駄な制度だろうか。大人も子供も罪は罪。同様に裁くべきであろう。最も、その少年法に救われているのは、俺もだが。

青木の頭を、もう一度ハンマーで殴った。更にもう一発。硬い物が割れるような音がして、同じ場所をまた殴ると、柔らかい感触。これで生きていたら、人間ではない。不思議と、良心の呵責や、殺

人の葛藤などは感じなかった。自業自得である。

さて、後片付けをしなければならぬ。まずは、駅前で貰ったティッシュペーパーでハンマーに付いている指紋を拭きとった。そして、血をもう一度つける。これで、犯行に使われたハンマーということになる。そして、返り血を浴びた靴を拭いた。

裏路地から出る。改めて、計画を見直す。そして、忘れていたことはいかを確認する。計画に穴はなかった。シンプルイズベスト（簡単なものの方が分りにくい）。これで大島がハンマーに触れたら良いのだが。青木は、大島と喧嘩をすると言いふらしていたし、あちらも同じであろう。あちらに、罪をなすりつけることが出来れば。

記憶のフラッシュバックが起きている間に、かなりの時間が過ぎていた。20時11分から22時58分までに、4名通り、その時間間隔は、上から、10、29、34、36である。3番目の人を狙おう。しかし、計画に支障が出てはいけない。念のために、ブラックジャックを用意しておこうか。大介は、口元に小さな笑みを浮かべると、すぐに表情を元に戻した。

一酸化中毒で殺そう！（後書き）

ワード1枚と半分です。

殺人実行

朝に目が覚めると、体が重く、汗で濡れていた。どうしたのか、頭も痛い。熱も出ているような気がする。何故なのだろうか。最近、不規則な生活をしているからかもしれない。

激しい頭痛に襲われながらも、大介は洗面所に行つて、熱を測つた。

38:00 今日はやめたほうがいいのか。自分の体調はともかくとして、なんらかのミスをしそうな気がする。下手をして懲役になるよりは、休んだほうがいいだろう。

意識の覚醒。だいぶ眠つたような気がする。計画の最終確認をしないでならない。まず、防犯カメラ対策として、マスクを掛けた方がいいだろう。インフルエンザが流行しているこの時期なら、不思議ではないはずだ。ニット帽も掛けておいたほうがいいのかもれない。髪型や色も誤魔化せるだろうし。これで、あとは殺す。本番だけだ。心臓の音が高まる。でも、一度殺したことがあるからか、そこまでではなかった。

遂に時間である。裏路地に隠れて、きつちりと時間通りに来る人を選んだから、失敗することは少ないだろう。でも、気まぐれでこちらに来る人がいたら、ブラックジャックで失神させてから、殺す。そして、近くにある山に捨てる。そうすれば、そう簡単に見つからないだろう。小説だから本当かどうかはわからないが、3メートル以上であれば埋めても探知されないと書いてあった。

遂に来た。未だ。やるしかない。大介は、路地から飛び出すと、女の顔にビニール袋を軽く掛ける。そして、タオルでビニール越しに口を塞いだ。そのあとに、紐でビニール袋の口を軽く縛つて、一酸化炭素を注入した。女は、不思議そうな顔をしたまま、冷たくなっていった。そして、仕上げに少しアルコールを入れてやる。

上手くできた。大介は、安堵した。大介は、川にニット帽とマス

クを犯行に使ったビニール袋に入れて、石を入れると、紐で縛る。そして、空気を抜いた。見上げると、フェンスが少し、傾いているのが見えた。誰か落ちたのだろうか。まあいい。俺には関係がないのだから。しかし、あと4人か。面倒くさい。そうしないと、殺される。

殺されても、別にいいんだけど。大介は思った。殺されても、俺は文句なんか言えないだろう。2人目だし。遺族や殺された人はかわいそうだが、運命だ。俺には、悲しんでくれる家族なんかいないし、酸素の無駄だ。2酸化炭素が増える。

そのとき、2酸化炭素中毒でも殺せるかな。と、大介は思った。

被害者？5

被害者・・・西川愛華

死因・・・一酸化炭素中毒

凶器・・・一酸化炭素

東村大介。殺害数2。現在賞金額100万円。

残り2人

目の前には、目を大きく開いた女……。口を両手で押さえている。大介は、手に持ったブラックジャックで、死神が鎌を降るかのよう
に女のこめかみを叩いた。

二酸化炭素『CO₂』言わずと知れた猛毒である。地球温暖化の
影響で、子供でも聞いたことぐらいはあるだろう。

7%でも死に至るといふその毒性。これを殺人に利用する。

まず、理科の実験用の二酸化炭素を通販で買い、殺人の時に、前
にやった方法で、二酸化炭素中毒死させる。そういえば、10日ほ
ど前に、ニュースで変死体が見つかったと言っていた。おそらく、
あの女だろう。変死体か。心筋梗塞とでも考えればいいものの。近
頃の医師は優秀で困る。予定が狂ったが、別にどうでもいい。まあ、
近頃の警察も優秀だが、すぐに捕まることはないはずだ。死因が特
定できるまでは、自分は安全地帯にいると思っていいたい。少し特殊な
方法だ。分かったとしても、あの場所で殺されたとは思わないだろ
う。

計画は、上手くできた。公園に誘導して、あらかじめ掘ってあつ
た穴に死体を入れる。土質は柔らかかったので、4 5時間で終わ
った。

子供達が遊びまわれば、踏み固まるだろうし、掘られても結構な深
さだから、見つかることはないだろう。3メートルと少しを掘る子
供なんか居る筈がない。

むしろ、問題はその後だった。息を呑む音。振り返るも、そこに
は闇しかなかった。

……気がはつているのかもしれない。大介は、そう考えた。でも、
物事はそう上手くいくものではない。

帰ろうとした時、見えたのは屈み込んで居る緑のワンピースを着

た女。顔立ちは、整っている方かもしれない。緑色が迷彩になって、気づけなかったのだろう。

3人目。スコップを入れてあったカバンから、ブラックジャックを取り出す。

目の前には、目を大きく開いた女……。口を両手で押さえている。大介は、手に持ったブラックジャックで、死神が鎌を降るかのように女のこめかみを叩いた。どさり、と女は倒れた。念のため、もう一度。叩いたときに悲鳴は出なかった。気絶している。大介は、カバンからゴミ袋を5枚重ねて、更に麻袋をその上から重ねた袋に女を入れた。

家に帰ると、レンガで女の頭を叩く。いや、潰すと表現したほうがいいかもしれない。女の肉片は、少し破れたゴミ袋の中に飛び散った。……青木の時もあったが、頭蓋骨は本当に固い。もう一回。少し、脳みそが見えてきた。

ワゴン車で、山へ向かう。雪が少し積もっていた。

……まずいな。雪があると、掘った後や、車の跡がついてしまう。仕方がない。大介は、大きな沼へ行くと、空気を抜いてから、女の入った袋を沈めた。沼は、濁っているため、血で赤くはならなかった。沈んでいく袋を見ながら、次はどうしようかと考える。

……だいたい、小説を書きたいから殺人体験者に実体験を聞いたなど、あの爺は何を考えているのか。自分で殺すか、殺し屋とも繋がっているはずだから、そういう人に聞けばいいのに。

被害者？ 6 / 7

被害者・・・南 桜 喜多川 美琴

死因・・・二酸化炭素中毒 撲殺

凶器・・・二酸化炭素 レンガ

東村大介。殺害数4。現在賞金額300万円。

自殺

「絞殺死体と自殺？」

里美は、ため息を付いた。全く……面倒くさい。

「今年は、厄年ですかねえ？ 自殺一人に行方不明1人。更に、絞殺死体と原因不明の死体が2人」

「そうだろうなあ。面倒くさいし、部下に殴られるし」

「あ、あれは……。そ、そう。事故です」

「事故で、あんなふうになるかよ。拳を握って、鳩尾にバツチリだ」

里美は、気まずそうに目をそらす。

「ま、まあ、部長の事故はどうでもいいとして」

「どうでもよくないからなっ！？ しかも、事故とちゃうわ！」
なぜか似非関西弁になった部長。しかし、そこはスルー能力の高い里美。

「どうでもいいとして、この事件について考えないと。上司

がまじめにやらないと、部下も、まじめにやりませんか？」

息切れをしている部長。

「どうしましたか？ 救急車なら呼びますが」

「お前なあ……」

自殺に見せかけるにはどうしたら良いか。まず、『自殺サイト』で、死にたい人を見つける。実際には死にたくなくても、『自殺サイト』に書いた『形跡さえあれば、死にたいものと思われるはずだ。

別に、自殺に動機など必要がないのだから。

ネットで調べていると、住所とメールアドレスが載っていて、『殺してください』と書かれているスレが見つかった。住所は、偽造ではないな。丁寧に話部屋番号まだ示されている。まあ、そいつを殺したくて書き込んでいる可能性もなくていいが。

実際に、地図で調べてみても、本当にある場所。しかし、問題はマンションだということ。これは却下だ。

次は

112 >108番さん

貴方、殺したいなんて書いてあったけど、本当に殺せるの？

殺せないなら、むやみな書き込みはやめましょう。殺せるなら、ここに来て。

メールアドレス ??? ABCDEF@??。住所 北海道

?? ?丁目*-*

2008/11/3 pm8:00

これなら 108番(UNUN@様ははは！ という名前だった)に罪を被せられるかもしれない。青木の時のように。

さて、飛行機に乗る際には、搭乗履歴が残るそれを、どう攻略しようか。その答えは、すぐに見つかった。

115 >109番さん

5日後の21時に僕の家に来てください。そこで殺します。

メールアドレス ??? GHIJKL@??。住所 大分

?? ?丁目*-*

2008/11/3 pm8:11

こいつ、馬鹿か。わざわざ住所まで書いたら、事件が起きたら、もろ捕まるじゃないか。……別に関係ないけど。わざわざ罪を被ってくれるんだから。

さあ、実行だ 二人共、死ねばいい。

トリック(前書き)

豪語しておきながら、大したものではない……。

トリック

彼、もしくは彼女の（彼でないのは、一人称では決められないため）ネット上に記された住所に着いた。監視カメラは見た感じではないし、家本体も目立った様子はない。

大介は、中学生の時の給食用の帽子を深く被って、髪の毛を家に落とさないようにした。そして、ビニール手袋（透明で、無臭のもの）を2重にする。これで、証拠は残らないはずだ。大介は、計画に穴はないか確かめた。……よし。大丈夫だ。自転車は、近くのスーパーマーケットに停めてきたから、不振には思われぬはずだ。

女が、男の家のインターホンを押した。自分には関係はないが、暗い雰囲気はこの場所に合わない音が、妙に不気味に感じられた。

女が入ったのを確認して、すぐに大介も入った。女を男が殺そうとしている。まず、大介は男を持ってきたロープで絞殺した。絞殺は初めてだがそんなに難しくはなかった。

女は、阿呆顔をしていたが、すぐに口を開いた。

「これで、私を助けたつもり？」

大介は、答える代わりに、素早く、用意していたロープを使って、女を持ち上げた。そして、そのまま落とす。ガクン、と音が鳴ったが、ロープは切れなかった。女は、失禁をしていた。まずい。早めに台を持ってこなければ。そうしなくては、なぜテーブルに漏れていないのかが問題になる。大介は、近くにあつた炬燵こたつを持って、彼女の真下に置いた。直後、服に浸透していた尿が、ピシヤリ、と水しぶきを立てて机の上で弾けた。異臭がする。これは、思ったより早く遺体が見つかるかもしれない。しかし、まだやらなくてはならないことがある。大介は、男のパソコンを起動させると、メモ帳に文字を打ち込んだ。

【遺書：私は、人を殺してしまいました。なので、責任をとって私は自殺します。少ない遺産ですが、親族で山分けして下さい。ま

た、殺してしまった人の遺族の方、大変申し訳ありません】

人を殺したあとなので、動揺していたら文法がおかしくてもいいだろうから、高卒の俺の文でも大丈夫だろう、と大介は考えた。しかも、『私』が一人称なのを大介は聞いたし、親族とあやふやに書いているから、疑われるとしても、まずは親族だろう。

やっと、5人だ。しかし、家を出るとき、誰かに見られているような気がした。その感覚は、ねっとりとしていて、大介の不安をかきたてた。

被害者？ 8 / 9

被害者・・・片岡京太 佐々木美麗

死因・・・絞殺

凶器・・・ロープ

東村大介。殺害数6。現在賞金額500万円。

理由

山川里美は、衝撃を受けていた。現場に残されていたデジタルカメラが、犯人を映し出していたのだ。

普通はわからないが、里美には、あれが誰だかわかっていた。それだけに、今回のことはショックだったのだ。

……大介が、犯人だったなんて。大介は、里美の恩人だったのだ。

あの日、彼を見たのはほんの偶然だった。

ぐしゃぐしゃになった青木の顔。それを殺している彼。

里美の弟は、青木に殺されたといっても過言ではなかった。いじめ。それを苦にして、自殺したのだ。

里美の目には、彼が救世主になった。

「あの……。殺してくれてありがとうございます」

「……？ どうしてですか？」

彼は、一瞬肩を上げたが、すぐに聞いてきた。

理由を話すと、彼は、「殺しておいてよかった」と言ったのだ。

そして、悪を裁くために警察に入ったのだが

こんなことになるなんて……。

私は彼を……逮捕できない。

「これ、誰だ？ ……おい、山川、顔色が悪いぞ。誰かが殺されるのはそれは嫌だろうけど……」

「い、いえ。平気です」
平気なんかではなかった。彼を 助けたい。
どうすれば……。

「課長！ 名前がわかりました！」

「おう。誰だ？」

「東村大介です」

「そうか。逮捕状は？」

「できています」

「じゃあ、行くぞ」

「はい」

……もう終わりだ。彼は……助からない。

「東村大介！ 殺人の容疑で逮捕する！」

大介は、その人物の顔を見た。

「ボ……ス？」

「何を言っている？」

「課長、どういう」

「いや、なんでもない」

どう考えても、彼はボスだ。

……警察の人間だったのか？

いや、あんな犯罪まがいなことをして……。

大介は、朦朧とする意識で、そのことを考えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8219x/>

殺人者には100万円

2012年1月14日12時48分発行